

辻純江 令和8年3月度特別作品

夫の死 辻純江

六十四年を一緒に過ごした夫が、十一月二十七日に他界しました。良いことばかりではなかったけれど、概ね幸せに過ごしたと思います。あんなこと、こんなこと、折々に思い出します。不思議に涙は出ません。一度だけ、声を上げて、一人で泣きました。夫の死は、別れてはなく、これからも、ずっと一緒だと思っています。

草紅葉刈られし池のよそよそし
公孫樹散る帽子の好きを夫なりき
入りたる柚子湯の話誰ともせず
冬ざりる車窓の景や旅一人
寒波来る夫の四十九日来る
供へたる蜜柑二つの光かな
翡翠のいつも来る抗冬夕焼
南瓜煮ぬままの今年の冬至かな
線香の煙の揺るる寒暮かな
だんだんに慣るる暮しや春隣

《作品鑑賞》 松田裕子
昨年末、ご主人が亡くなられてご心痛如何ばかりかと推察いたしました。

本当に仲の良いご夫婦で、いつも羨ましく思っておりました。ご主人の包容力にいつも守られて、二人三脚で幸せな結婚生活を送られました。句のあちこちに喪失感を感ずることができ、何度も何度も読み返しました。

辻さんの感性豊かでセンスある俳句が大好きです。

草紅葉刈られし池のよそよそし
擬人化ではありますが、センスの光る俳句です。さっばりした池の周りがなぜか寂しく感じるので。

入りたる柚子湯の話誰ともせず

柚子湯にほっこりしても、話す相手がいないのです。表現力にただ感心するばかりです。

寒波来る夫の四十九日来る

少し心の整理ができた頃、寒波が来たのでしよう。来る、来るのリフレインが効いています。

南瓜煮ぬままの今年の冬至かな

いつもは、ご主人の好物の南瓜を冬至には煮るのです。具体的に南瓜を出したことで、いっそう作者の寂しさが表現されています。

だんだんに慣るる暮しや春隣

春隣が、前を向こうとする作者の決意をはっきりと表しています。ご主人は、いつもあなたを見守っていらっしやいますよ。